

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2013.7 No.77

トピックス

ミニ企画展・文化財めぐりの開催
美作1300年記念企画展への協力

寄贈資料の紹介

西東三鬼関連資料と津山市内小字図

研究ノート

津山城完成伝承について 尾島 治

お知らせ

特別展・バス旅行のご案内



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

ミニ企画展開催中!

現在、ミニ企画展「布の魅力」を開催中です。

布は、世界中の人々にとって、なくてはならないものです。日常的に使われるもの、特別な日に使われるもの、「衣」となるもの、「袋」となるもの、さまざまな用途があり、人々に

とって一番身近な存在かもしれないかもしれません。だからこそ、布にはその土地の人々の生活やこだわりなどが表われていると言えるでしょう。

今回のミニ企画展では、アジアや中南米などで、花嫁道具として用いられた布や、風呂敷のように使われ

た布など計6点を展示しています。その美しさや素朴さを楽しんでいただければと思います。

また、今回の展示の準備は、職場体験中の中学生に手伝ってもらいました。貴重な経験になったのではないのでしょうか。



展示風景



職場体験の様子

5月の文化財めぐり 〔広野地区を歩く〕

今年度最初の文化財めぐりは5月25日に行われました。

今回は、高野公民館から出発し、田熊八幡神社で折り返して戻ってくる約10km

ほどの道のりでした。

当日は快晴で、季節外れの大変暑い日でしたが、新緑が薫る初夏の日、参加された皆さんは一日ハイキングを楽しまれたようでした。



博物館キャラクター「パレ夫」

美作国建国1300年記念企画展への協力

岡山県立美術館「美作の美術展」5月31日～6月30日

美作建国1300年を記念して県立美術館で開催された「美作の美術展」に、当館から多数の資料を出品しました。

当館から貸し出したのは、江戸一目図屏風や津山景観図屏風など歙形蕙斎くわがたけいさいの作品をはじめ、広瀬台山・赤松麟作の作品や墨書土器など、古代から近代にかけての20点を超える館蔵・寄託の資料です。

安養寺の十一面観音立像など、当館のみならず美作地域一円から集められた貴重な資料が一堂に展示され、見ごたえのある展覧会でした。



美作国キャラクター
「かたみくん」



津山景観図屏風(右隻)



墨書土器



江戸一目図屏風

岡山県立博物館「美作の名宝」7月25日～9月1日

美作建国1300年記念事業として岡山県立博物館で開催される企画展「美作の名宝」にも、当館から多数の資料を出品します。

当館から貸し出すのは、袈裟襷紋銅鐸けさだすきもんどうたくや熊毛槍（以上、県重文）、津山松平藩主所用乗物（市重文）などの13点です。

会期はちょうど夏休みと重なっていますので、ご家族やお知り合いでお誘い合わせて、多くの方々に足を運んでいただければ幸いです。



袈裟襷紋銅鐸



津山松平藩主所用乗物



熊毛槍

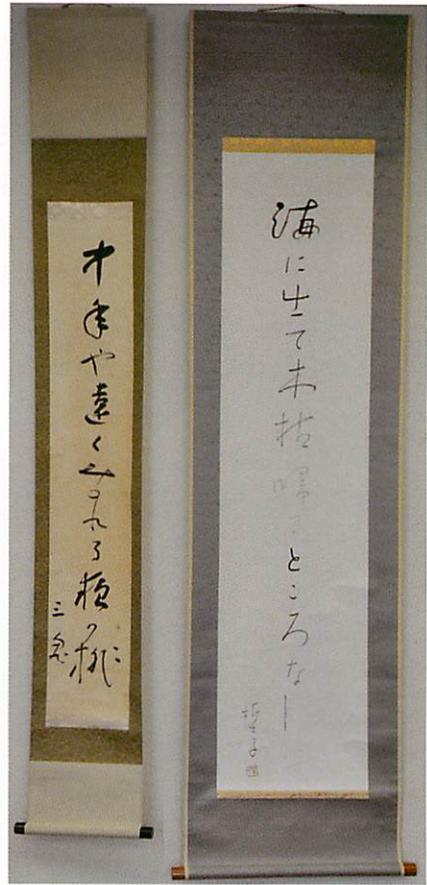
西東三鬼に関する資料と津山市内の小字図



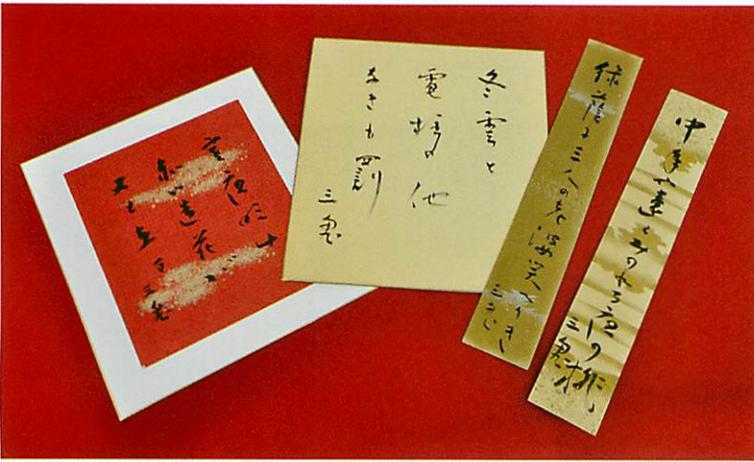
三鬼の肖像写真



三鬼の句集（左）と俳句雑誌『断崖』



俳句書幅 左が三鬼、右は山口誓子



色紙・短冊

5月下旬、西東三鬼および俳句に関する資料と津山市内の小字を調査した図面など合計106点の資料が寄贈されました。これは、津山市の元職員で三鬼の直弟子であった故・白石不舍氏（本名・哲）が収集・所蔵または調査されたものです。

まず俳句関連の資料は、三鬼を中心として彼と交流のあった俳人たちの掛軸・短冊・色紙や、三鬼の句集、彼が主宰して創刊した俳句雑誌『断崖』、そして三鬼の写真額などです。

津山出身の三鬼は、季語にとらわれず多くの俳句を創作して新興俳句運動を牽引しました。「水枕ガバリと寒い海がある」の句が有名です。

その三鬼に師事した白石氏は、自らの創作活動と後進の指導に精力的に取り組み、「西東三鬼賞」を創設して全国的にも権威ある俳句文芸賞として定着させるのに尽力しました。

これらの資料は、三鬼を師と慕い、その顕彰に努める中で白石氏が収集されたものです。ご遺族から頂いた貴重な資料を、これからも長く大切に保存し、展示などで有効に活用してまいります。

そして津山市内の小字図は、白石氏が俳句と並ぶライフワークとして生前に各地を丹念に調査された貴重な成果です。戦後の区画整理と現代的な住居表示の推進により、古い由緒を持つ各地の小字は急速に消滅しつつあります。こうした小字を、古文書と現地の照合や聞き取りで調査し、地籍図に色分けして書き込んだ力作で、総数28枚、旧津山市域のほぼ全域に及びます。その画像データを館内で閲覧できるようにするため、現在各図を撮影中です。閲覧希望の方は、当館にご相談ください。



山北・上河原・沼周辺の小字図



博物館キャラクター「津郷之介」

津山城完成伝承について

尾島 治

はじめに

一般に、森忠政の壮大な津山城は、慶長九年（一六〇四）に着手した後、十三年の歳月を経て元和二年（一六一六）に完成したとされている。もちろん、この「完成」は、一応の工事終了の意味であって、厳密には完成していないことは、津山城跡の現状や江戸時代の様々な城絵図等からも明らかである。しかし、ここでは、用語の混乱を避けるために、津山城築城工事が一区切り付いた時点で、完成という表現を用いることとする。

ここで問題とするのは、一応完成したとされる時期についての伝承である。築城の時期に関しては石垣の積み方や、あるいは天守や御殿の建築様式などから推測することも可能であろうが、ここでは、記録や伝承に残された築城時期に限定して考察を進める。伝承の内容と、実際の石垣や建築様式からみた完成の時期についての照合は、後日の課題としておく。

ここで敢えて伝承について取り上げる理由は、永い年月の間には資料の確認が不十分なままに、不確実な伝承が定説として流布してしまう例

が多いためである。衆楽園が、森氏の時代から御対面所と称して使用されていたとする伝承などは、その典型的な例であろう。

津山城の築城時期に関する伝承としては、慶長九年（一六〇四）の築城着手については、様々な伝承でもほぼ一致しており、忠政の美作入封一年後という時期からも、問題はなだらうと思われる。しかし、完成時期に関しては、一次資料が残されていないため、伝承に頼らざるを得ないのだが、その伝承の文言には曖昧さが残されており、すつきりとした答えが出ていないのが現状である。そうした中で、不確実な完成伝承が一人歩きしている現状を確認しておくことがここでの目的である。そこで、様々な伝承や記録を再度整理した上で、津山城の完成時期に関する伝承について検討してみたい。

完成時期に関する記述

まず、現状ではどのように記述されているのか確認してみよう。最も基本的な文獻となる『津山市史』では、元和二年の春に至って完成し、この年三月下旬壬辰の吉日に落成の祝典

を挙げた。慶長九年の春の起工から十三年」として、津山城の築城に十三年の歳月を要して元和二年（一六一六）に完成したとしている。この場合、慶長九年は一六〇四年であり、単純に十三年を足すと、一六一七年となり、元和三年になつてしまう。つじつまを合わせるならば、慶長九年を含めて十三年間ということになる。

この説は、『津山市史』の割注によれば、矢吹正則の『森松平両公治績調書』の「築城起工ヨリ経営十三年元和二年丙辰三月ニ至テ城郭全ク成ル同月下旬壬辰日ヲ以テ新城ニ移住セラル」という記載から取っている内容と思われる。この『津山市史』の記述は、近代の編纂物を根拠としての叙述であり、基本的には、原本が一次資料ではないため、その根拠資料の確認が必要である。しかし、現時点では、矢吹が『森松平両公治績調書』の執筆に用いた根拠資料に関しては不明である。

また、同様に津山城関連資料としてしばしば用いられる『津山城廃毀始末』は、明治六年（一八七三）に北条県が纏めたものであるが、ここでも明確に「慶長九年津山ニ此れを相して築城に着手し元和二年に至り

十三年を経て竣工せしものなり」としている。この『津山城廃毀始末』の作者は特定できないが、北条県の作成であれば、北条県の官吏として美作地域の歴史調査を担当していた矢吹正則の調査が基礎になっている可能性が高い。

これらでは、元和二年の完成と記しているが、その表現全体では、元和二年の完成ということよりも、十三年を経て完成したということが強調されているように感じられる。着手年や完成年の年号よりも、むしろ何年かかったかに重点が置かれているのである。これには、一般的な築城の叙述としての不自然さを感じざるを得ない。更によれば、十三年という数字が先に存在した上で、着手年と完成年が付け足されたような印象すらするのである。

いずれにしても、これらは、明治以降の著述であり、その出典が定かにされてはいない。その基礎となつていられる江戸時代の記録を確認することが必要である。

江戸時代の記録

既にみたように、築城当時の一時資料は残されていない。当然、江戸時代の記録や伝承といつても、それらも全て後世のものである。信頼性の高い資料としては森家が文化年間に編纂した『森家先代実録』であるが、

これにも、確実な完成年の記載はない。しかし、当時の状況を知る手がかりは多くあるので、それについては後述することにする。

さて、松平家の時代になっても、森家の歴史を伝える記録や伝承は作成され、今に残されている。それらの中で世間に広く流布していたのは、『森家盛衰記』といったタイトルの写本類である。これは、森家の美作入封から改易までを叙述した物語風の読み物で、写される過程で様々な改変が加えられたり、表題が変わっているものもある。当初の制作年は分からないが、現在残されている写本の多くは、江戸時代中期以降のもと思われる。

その中の記述は、例えば「慶長六年ヨリ始リ元和元年迄漸致成就也」や「鶴山御城御普請慶長六年方(より)始元和元年迄中年漸致成就候」といった内容である。この「慶長六年(一六〇一)」については明らかな誤りで、忠政が津山に入ったのが慶長八年(一六〇三)であることを知らないままに写していったと思われる。

ただ、美作地域に残されている森家関係の偽文書の中には、慶長六年という年号のものがよく見られる。その理由は明らかにできないが、『森家盛衰記』のように一般に流布していた読み物が、そうした偽文書の影響を受けていたとしても不思議ではないだろう。あるいは逆かもしれない。

いが、ここでは、その判断は措いておく。

この場合、元和元年完成説とでもするならば、その根拠がどこにあつたのかということが問題になるが、それについては不明である。

また、享保十年(一七二五)に松平家臣津田重倫が編纂した『作州記』では、「城普請慶長八年に始まり元和元年に終り、合せて十三年。内三年普請休息。」とある。そして、注記として「イニ九年に始八ヶ年に了」とある。この内容もすつきりとは理解できないが、十三年という数字に注目すれば、そこに共通項がある。忠政の入封後直ちに築城を開始したとして、慶長八年からの十三年の経過を生かすために、元和二年ではなく元和元年の完成にしたとも考えられる。

それでは、これらよりも古い江戸時代の記録ではどうだろうか。元禄十年(一六九七)の津山城引き渡しの際に、城番として津山に滞在した広島浅野家の記録「作州津山御城内之記」(『津山城 資料篇』)は、その際の記録と考えられるが、ここでは「地形縄張慶長八年方初而同拾三年にて止ム」とある。これが、津山城完成の時期に言及している、現在確認できる最も古い資料である。

この文章からは、慶長八年から地形縄張りを始めて、慶長十三年に工事を止めた、と読める。

これを文字通り「地形縄張」の計画策定作業が慶長十三年に終わったという読み方はできないだろう。計画策定だけに五年間も掛かるとは思えないし、地形縄張りから始めて、一通りの工事が慶長十三年に終わったと読むのが素直であろう。開始年代が慶長八年となつている点については、計画策定を含めれば、工事着手が慶長九年とされていることと、矛盾はしないだろう。

慶長十三年に「止ム」

『森家先代実録』の編纂に際してその基本となつた『武家聞伝記』は、元禄以前に記録された内容も多くあり、その信憑性も高い。そしてそこでは、慶長九年(一六〇四)の春「木村久兵衛ニ御城地祭被仰付」とあり、その後、慶長十年には、「御城御普請大形成就候ニ付同年九月十六日於御城大磬(ママ)若御経有り」とある。

これによれば、城普請は慶長十年の段階で「大形成就」していたのであり、築城工事はかなり進展していたことを意味している。普請を本来の意味である土木工事と理解するとしても、全体として石垣工事ができていたとすれば、建築工事も順次進んでいったと見るべきであろう。

このことを裏付ける内容として、森家の子どもが津山城で誕生していることがあげられる。『森家先代実録』

によれば、忠政の第八子忠広は、慶長九年に「作州苦南郡院庄村」で生まれているが、第九子御兼は、慶長十一年に「津山にて」生まれている。忠広以前の子どもたちは、「川中島」や「金山」で生まれたとされており、ここで敢えて「院庄村」と「津山」を区別するような、こうした表記の正確な区別からして、少なくとも慶長十一年には、藩主一族の居住地は津山城であつたと考えられる。

だとすれば、矢吹正則の『森松平両公治績調書』の「築城起工ヨリ經營十三年元和二年丙辰三月二至テ城郭全ク成ル同月下旬壬辰日ヲ以テ新城ニ移住セラル」という記載の中で、少なくとも「(元和二年)同月下旬壬辰日ヲ以テ新城ニ移住セラル」という内容は、疑問とせざるを得ない。

その一方で、この『森家先代実録』の子どもたちの誕生記録や、『武家聞伝記』の「御城御普請大形成就」という記録は、浅野家の記録と矛盾無く理解することができる。

また、『森家先代実録』には、慶長十一年十月朔日「蕎麦尾山釣鐘ヲほり出ス」とあり、これは、天守の釣鐘にと献上されるところを、森家が寺に戻したという伝承の釣鐘である。そして、慶長十三年春には、「中村伯耆守殿從伯州江戸へ御参府之節御当地へ御立寄御城二宿」とある。この記録を信用するならば、津山城にはそれなりの御殿が完成していたと考

えるべきであろう。

そして、同年春、城普請奉行園前四郎右衛門を待ち受けて、足軽が、内山下の今村与一右衛門屋敷前で四郎右衛門を襲ったという。ここからは、城内の家臣屋敷も、一部はできている状況が知られる。

その慶長十三年には、重臣による石山での喧嘩事件が起きているが、その際には、津山城の堀と門が既にできている状況が記されている。

いわゆる津山城の完成

森家の歴史を編年体で伝える『森家先代実録』では、慶長十三年（一六〇八）を最後に、築城に関連した記載は見られなくなる。これだけで、単純に結論を出すことはできないが、慶長十三年の石山での喧嘩事件の後、一応の築城工事が終了したために記事がなくなつた、とも考えられるのではないか。

勿論、その後も部分的な工事が続いていた可能性もあり、最終的には元和の一國一城令により、終了したと考えることもできよう。しかし、区切りとしてのいわゆる城の完成というならば、実際には完成することの無かつた津山城にあつては、大きな区切りとなつた慶長十三年を想定することもできるのではないだろうか。

「作州津山御城内之記」には、「成就」ではなく「止ム」とあり、その後

続けて「長普請に上下退屈して休息のため六年に半途にしてやむ其後故障有て不遂本懐と云々」とあり、中途ながら築城工事を中止したことが伺われ、その後の津山城の現状と一致している。

『森家先代実録』では、「津山城地固の祈禱」の記事に続いて、「其後年々十三年にて城普請成就之由」とある。ここに「由」とあることが、資料や伝承の曖昧さを示している。後の世の文化年間とはいえ、当事者の森家で編纂された『森家先代実録』でさえ、不確かな伝聞としての「由」を用いなければならぬほどに、完成の時期については、確実な資料が残されていないのである。その中で、なぜか「十三年」が、その後の多くの記録や伝承の共通項として伝えられている。

着手から十三年を経て完成したという伝承の原因を推測してみると、もし、この「作州津山御城内之記」の内容と同様の記事や伝承から「同」を見落とすと、十三年後に工事を止めたと読むこともできるだろう。その内容が伝承されていけば、壮大な津山城ならば、十三年くらいかかってでも不思議ではないと、後世の人々が考えたとしても、まさしく不思議ではないだろう。

第100回文化財めぐり 研修バス旅行のご案内

淀川沿いの街道筋の史跡探訪

友の会会員の皆さんに毎回ご参加いただいている「文化財めぐり」も、おかげをもちまして今年11月で通算100回を数えることになりました。第100回を記念して、研修バス旅行を計画中です。日程が近づきましたら、改めて会員の皆さんに案内状をお送りします。ふるってご参加ください。

■趣 旨：琵琶湖から京都を経て大阪湾へ流れ込む淀川の流域は古くから開けた土地で、川に沿って人や物が行き交い、やがて街道が形成されました。川の北には京都から西国へ向かう西国街道（山崎通）、南には東海道の延長として京都と大坂を結ぶ京街道が通っています。今回はこれらの街道沿線の史跡や資料館をめぐります。

■日 程：平成25年 **11月2日(土)** ※前号で11月9日とご案内しましたが、左のとおり変更します。

■見学先：大山崎離宮八幡宮、枚方宿鍵屋資料館（写真左）、今城塚古墳（写真右）、郡山宿本陣など



博物館キャラクター
「ファイアー」

美作建国1300年記念特別展

つち ひつぎ ねむ みまさか とう かん

『土の棺に眠る～美作の陶棺～』を開催します

美作国は、和銅6年（713）に備前国から分国し、2013年は建国1300年に当たります。これを記念して当館では、今年度の特別展として「土の棺に眠る～美作の陶棺～」を開催し、美作国で数多く用いられた陶棺に焦点を当てます。

陶棺は、土でできた焼き物の棺で、主に6世紀末から7世紀代の後期古墳に多くみられます。全国で陶棺は約700例出土していますが、そのうち岡山県での出土は約75%にのぼります。また、県内での出土は美作が約7割をしめており、陶棺はまさに美作を特徴づける遺物の代表といえるでしょう。

この陶棺がいつごろから作られはじめたのか？ また、どのような人のために制作されたのか？ 本展では、様々な謎を秘めた陶棺を、美作各地の出土品を中心に展示し、陶棺が制作された時代背景や、その被葬者像に迫ります。

【会 期】平成25年10月19日(土)～12月1日(日)

【休館日】10月21日(月)・28日(月)

11月5日(火)・6日(水)・11日(月)・18日(月)・25日(月)・26日(火)

【会 場】当館 3階展示室

■関連事業

①美作国建国1300年記念「陶棺復元プロジェクト」

津山市新野山形水原古墳出土の陶棺をモデルとした陶棺を原寸大で復元します。

②シンポジウム「陶棺の謎に迫る」

【日 時】平成25年10月27日(日) 13:30～

【場 所】勝北文化センター

※①で復元された陶棺は、②の会場で当日展示し、その後は特別展が終了するまで当館で展示します。

大 博物館だより「つはく」
No.77 平成25年7月1日

津博
TSUJIBOKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail t-kyoudo@tsu-haku.jp

【印 刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休 館 日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月27日～1月4日)・その他

【入 館 料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。